



千代田区立教育研究所

第84号

所 報

令和5年12月1日

COCOLO プランの推進について

(Comfortable、Customized and、Optimized、Locations of learning)

千代田区立教育研究所

所 長 山 本 真

「COCOLO プラン」については、皆様もすでにご存じのことと思います。令和5年3月に、文部科学省から示された「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」に関する指針です。

令和3年12月1日に発行された「千代田区教育研究所 所報 第82号」においても、不登校に関する国や都の動向及び本区の対応等について述べましたが、あらためて「COCOLO プラン」をもとにしながら、今後の本区の不登校対策について紹介いたします。

【全国の不登校児童・生徒数】

※国公立小・中学校対象 ※（ ）内は1000人当たり不登校児童生徒数

	H29	H30	R1	R2	R3	R4
小学校	35,032人 (5.4)	44,841人 (7.0)	53,350人 (8.3)	63,350人 (10.0)	81,498人 (13.0)	105,112人 (17.0)
中学校	108,999人 (32.5)	119,687人 (36.5)	127,922人 (39.4)	132,777人 (40.9)	163,442人 (50.0)	193,936人 (59.8)

【令和4年度における学年別不登校児童・生徒数】 ※単位：人

学年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
人数	6,668	10,047	13,823	18,373	25,430	30,771	53,770	70,622	69,544

「COCOLO プラン」では、目指す姿を以下のように示しています。

- 1 不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整えます。**
 - ・一人一人のニーズに応じた多様な学びの場が確保されている
 - ・学校に来られなくてもオンライン等で授業や支援につなげることができる
 - ・学校に戻りたいと思った時にクラスを変えたり、転校したりするなど本人や保護者の希望に沿った丁寧な対応がされている
- 2 心の小さなSOSを見逃さず、「チーム学校」で支援します。**
 - ・1人1台端末で小さな声が見え、心の不安や生活リズムの乱れに教師が確実に気付くことができる
 - ・小さなSOSに「チーム学校」で素早く支援することにより、早期に最適な支援につなげられている
 - ・教育と福祉等が連携し、子供や保護者が必要な時に必要な支援が行われる
- 3 学校の風土の「見える化」を通して、学校を「みんなが安心して学べる」場所にします。**
 - ・それぞれの良さや持ち味を生かした主体的な学びがあり、みんなが活躍できる機会や出番がある
 - ・トラブルが起きても学校はしっかり対応してくれる安心感がある
 - ・公平で納得できる決まりやルールがみんなに守られている
 - ・障害や国籍言語等の違いに関わらず、色々な個性や意見を認め合う雰囲気がある

このような指針を受け、千代田区としても、適応指導教室（白鳥教室）の機能拡充や校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム等）の設置、東京都の施策であるバーチャル・ラーニング・プラットフォーム（VLP）の活用、フリースクール等との連携に関する検討を進めてまいります。

【目次】

- | | |
|--------------------|---|
| 1 調査研究 (p.1,2) | (1) 所内研究 (2) 教育課題調査研究 |
| 2 研修 (p.3,4) | (1) 幼児教育
(2) 若手教員育成研修 ①1年次 ②2年次 ③3年次
・「中堅教諭等資質向上研修」 担当指導主事 |
| 3 いじめ・不登校等 (p.5,6) | (1) 誰一人取り残されない学びの保障に向けて
(2) スクールソーシャルワーカー (SSW) について
・「個別最適な学びの実現に向けて」 担当指導主事 |
| 4 白鳥教室 (p.7) | |
| 5 教育情報 (p.7) | (1) 教育情報資料 (2) 教科書採択・教科書展示会 |

1 調査研究

(1) 所内研究

今年度の全体研究主題を「千代田区の教育施策を深めるために～『つなぐ・つなげる 千代田の教育』の一層の充実を目指して～」と設定しました。その上で専門員（教育研究・学校問題対策）それぞれが副題を設け、基本的な資料や文献の紹介・意見交換等を通して学び合いました。10月までの所内研究で取り上げられた副題と主な内容は次の通りです。

月 日	主 な 内 容
5月30日	○千代田区の園児、児童、生徒の体力の現状と課題及び区の施策 ・体育健康教育推進委員会、がん教育、食育 ・部活動の地域移行 ・コーディネーショントレーニング ・所員による意見交流等
6月17日	○子どもの自殺を防ぐために どのような取組を進めていけばよいか ・統計に見る子どもの自殺（概要） ・学校における子どもの自殺予防策の重点 ・自殺予防の対策に資する教育内容 ・「SOS の出し方に関する教育」の具体例 ・所員による意見交流等
10月4日	○不登校の対応ー今までの経験とこれからの取組ー ・未然防止、早期発見、早期対応の重要性 ・学校組織と関係機関による組織的な対応 ・千代田区における関係諸機関の連携・協力の具体例 ・所員による意見交流等

これからの所内研究は、次のような内容で実施する予定です。

- 子どもの読書活動の推進に関する内容
- 生徒指導提要、文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」に関する内容
- モラルジレンマを活用した道徳や話し合い活動に関する内容
- 体育健康教育に関する内容

研究員全員参加による「所内研究会」



今後も教育研究所として学校教育・心理・福祉の視点から研究主題に迫り、その成果を若手教員育成研修や各学校園への情報提供等に資するよう努めてまいります。

【担当】 <教育研究専門員> 宇田川 嘉一・額賀 聡

(2) 教育課題調査研究

千代田区の教育課題に関して調査研究を行うことにより課題解決を図り、その調査研究結果を踏まえて、学校（園）教育において活用できる指導プログラムを作成することをねらいとして、令和5年度の教育課題調査研究部会がスタートしました。そして今年度の調査研究は、令和3年度から継続する3年次の研究の節目に当たります。調査研究部員は、各小・中・中等教育学校から計13名（3年継続部員3名・2年継続部員4名・新規部員6名）が代表として選ばれ、下記に示すように、ねらいに沿った関連な取組を意欲的に展開してきています。

① 研究内容の理解と協議

まずは、昨年度までの取組について、これまでの調査研究資料を基に小グループでの協議を通して理解を深めました。また、部会テーマである「すべての児童・生徒にとって、主体的に思考を深められるICTの活用」に迫るために、千代田区の教員専用のSNS「ちよらぶ」等を活用した情報共有の活性化や「Viva Engage」の活用、これからの調査研究の見通しなどについて話し合いました。そこでは、「ちよらぶ」が稼働しているものの、まだ周知が足りないことが報告され運用の仕方を工夫していくことが浮き彫りになりました。

② 調査研究部員のチームビルディングを兼ねた体験研修と投稿の実践

各回の調査研究部会では、ICT活用に係る各種のトレーニングを体験しながら部員同士の交流を進め、限られた研修時間を有効に活用してきています。例えば、部員の自己紹介では、ChatGPTに、「ICT機器を活用してクラスで楽しく主体的に自己紹介をする方法」を聞いた回答を複数示し、その中からクイズ形式を選んで自己紹介をしました。同時に、部員一人一人がグループワークの一環で、実際に「ちよらぶ」への投稿にトライすることを体験しました。

③ 外部講師を招いての研修「投稿の実践と計画」

この研修では、チャットでのコメントを書き込む際に重要となる要素について具体的に学びました。それは、「個人の成果」「他者の成功への貢献」「他者の知見の活用」の3つです。一般的には個人の成果の発信だけで終わることが多く、これだけでは三分の一の成功でしかないとのこと。「～先生のお蔭で～ができるようになりました。～先生、ありがとうございました。」といった他者を巻き込む内容は、すぐに実践できそうだと調査研究部員の反応がありました。他者の知見を活用した実践成功例などについても同様です。

④ コミュニティの紹介を通じた研修

「ちよらぶ」と共通する点が多いと考えられる他のSNSについて、体験的に知り理解を深めました。その上で、「ちよらぶ」でつながることは、上述したように「投稿してコメントをもらう＝巻き込む」ことに他ならないのではないかと話し合いました。

⑤ 情報発信に係る困り感の集約と解決策の提示

千代田の知をつなぐ教員専用SNSコミュニティとして、こういう情報がほしいというニーズをつかんでいくようにしたいものです。また、各校（園）でほしい情報は何かを集約していくことも考えています。いずれにしても、令和5年度末の発表会に向けて、そのもち方を含め調査研究部会としての配信をどのようにしていくのか、精査を重ねているところです。

指導担当である指導主事による年間9回の調査研究部会の進行管理は、毎回積み上げられる的を射たICT研修とともに、その精度を見事なまでに高めてきています。それは、毎部会にて熱心に呼応し続ける各校から選出された代表教員各位の、「オール千代田」の力に支えられているからこそ実現しているのだと思っています。今後の取組が、大いに期待できる教育課題調査研究です。

【担当】 <教育研究専門員> 額賀 聡・長田 眞理子 <指導主事> 塚田 恭平

2 研 修

(1) 幼児教育

本号では3年次教員研修を紹介します。今年度は幼稚園・こども園教員2名(共に4歳児の保育担当)を対象に「幼児理解を深め、評価・改善につなげる」を研修テーマに掲げました。

全体会(5・12月)・訪問指導(1・2学期)・保育参観(6月)・夏季研修会(8月)を実施し、本区において園長経験がある年間講師の先生から継続的に指導・助言をいただいています。

第1回全体会では、山本指導主事による演習・協議「これまでの自己の保育について振り返る」を通じて自らの課題を明らかにしました。具体的には3年次教員が身に付けるべき力を、4つの力(指導力、外部との連携・折衝力、幼稚園運営力・組織貢献力、その他の力)から見直し、できるようになったこと・これから身に付けたいことを整理しました。

夏季研修会では、1学期の訪問指導と保育参観の成果と課題を踏まえ、外部の専門家による講義・演習を通じて、研修生一人一人が保育の充実に向けた課題を明らかにし、より具体的な方策を見いだすことができました。例えば、A教諭は【指導力】に関して「子どもの言葉や行動をどこまで受け止めればよいか」と悩んでいました。しかし研修を通して「どこまでではなく、どう受け止めていくかが大切であることが分かってきた」と述べていました。さらにB教諭は、子どもの次の意欲につながる肯定的な言葉、子どもが納得する手助けとなる分かりやすい言葉を掛けていきたい」と具体的な方策を考えることができました。

3年次研修では【外部との連携・折衝力】【幼稚園運営力・組織貢献力】等も身に付けることをねらいとしています。保護者や地域の思いを受け止め、外部機関とも適切に連携を進め、組織の一員として積極的に園務に参画し、学び続ける教師の育成を目指しています。

【担当】 <教育研究専門員>宇田川 嘉一・長田 真理子
<指導主事>山本 孝之

初任者研修開講式



(2) 若手教員育成研修

① 1年次

【校外における研修】

山本指導課長・研究所長による講義・演習「新任教員に期待すること」からスタートした研修会は、回を重ねるごとに広く深い内容となってきました。今年度は、幼稚園・こども園では3名、小中学校では7名が研修の対象者となっております。以下に紹介する研修会には、校種や職種によって参加の有無が規定され(幼稚園・こども園…第1,5,7,8,9,10回に参加、小中学校…全回に参加)、それぞれが別枠の指定された研修会でも研鑽を積みながら一年を過ごします。

回	月	主 な 内 容
1	4	◆開講式 ◆講義・演習「新任教員に期待すること」「教育公務員としての在り方」「新任教員としての心構え」「教員に求められる力」
2	5	◆模範授業の参観と協議 ◆講義・演習「授業力の向上を目指して」「学習指導と評価」
3	6	◆講義・演習「食物アレルギーの理解と対応」「いじめ防止 体罰の禁止」「不登校・中退防止の取組」「情報モラル教育の推進」
4	7	◆講義・演習「学校教育と教員の在り方」「自殺防止の取組 SOSの出し方」「生活指導の充実と問題行動への対応」
特別	7	◇区内巡り(グループごとの調査活動と発表 講評)
5	7	◆講義・演習「メンタルヘルスセミナー」「学級経営の意義と指導」「学級づくりの実際」「キャリア教育」「学習指導案の作成」
特別	8	◇夏季集中研修 講義・演習「授業・保育の改善に向けて」(課題 特別支援教育 ICT 主体的・対話的で深い学び 具体的な改善策)
6	10	◆学校訪問研修 東京都立江東特別支援学校 普通科・職能開発科授業見学と体験活動
7.8.9		◆小学校研究授業・研究協議(11月) ◆幼稚園研究保育・研究協議(11月) ◆中学校研究授業・研究協議(1月)
10	2	◆講義・演習「これからの教員に求められる力」 ◆閉講式

夏季集中研修(2日間)では、講義とグループごとの演習を行いました。研修生の意欲的なプレゼンテーションには学校教育の今日的な課題への提案が随所に見られました。研修会の総括として、山本指導課長・研究所長より講話をいただきました。研修生一人一人が研修を振り返り、その目的を再確認し、子どもへの熱意をもって2学期を迎えようとする意識を高めることができました。

【校内における授業に関する研修】

1学期に授業等の参観を通して、教師と子どもの関わり方や学級づくりについて指導・助言しました。そこでは、各校の校長・副校長が同席し、初任者は改めて研修の意義について理解することができました。2学期には、学習指導案の作成や教材研究について理解を深め、授業後の協議等を再構成指導案や事後授業に反映させ、今後の課題を明らかにしていくことができました。

【担当】 <教育研究専門員>宇田川 嘉一・本橋 智博 <指導主事>齋藤 秀章

② 2年次

研修のねらいは、「学習指導力」「生活指導力・進路指導力」の向上に向け、演習やグループ協議を取り入れて、研修生（7名）が主体的に学びを深められるようにすることです。同時に、特別支援教育に関する研修での学びを、通常の学級における学習指導の手だてとして活かすことができるようにすることを目指します。

年間3回（5月、8月、1月）の計画で、5月には千代田小学校3組の授業観察に臨み、その後、授業力の6要素に準じて自己の授業を振り返る協議等を実施しました。事前に授業観察のテーマを、「特別支援教育の視点に基づく授業改善」とすることを研修生に伝え、併せて、2学期に1回実施する授業研究を含めた1年間の研修について見通すことができるようにしたのは、たいへん効果的だったと考えています。

また、8月には、2学期に実施する授業の学習指導案を持ち寄り、授業づくりの土台となる指導観から授業の構想を練っていくことを、小グループにおける他者との協議を通して具体的に学ぶ研修等を実施しました。研究協議のまとめでは、リフレクションに取り組みました。この時間は、できたこととできなかったことの両方「を確認、内省して他者に発表していきます。そこで第三者が客観的な視点でフィードバックすることにより、さらに新しい気付きを得る振り返りが生まれ、自身のキャリアの発展につながっていくと信じています。

特別支援教育の視点
に基づく授業改善



③ 3年次

「外部との連携・折衝力」「学校運営力・組織貢献力」等の課題解決力の伸長を図り、若手教員として必要な資質・能力を高めることをねらいとする研修です。それだけに、研修生が教育研究所や関係諸機関等との連携をさらに深め、主体的な研修を進めていくことができるように、研修方法について精査していくことを主眼に据えています。対象である2名の研修生は、年2回の授業研究の他、5月と2月の年次研修会に取り組みます。そこでは、地域と学校組織への強い関心と参画意欲を育んでほしいと考えています。

5月の研修では、関係諸機関等の各講師陣との対話と協議を通して、研修のねらいをしっかりと受け止めることからスタートしました。子どもたちの社会的な自立を様々な面から支え促していくことが、講師陣の所属する機関等の役割であることを、ワークシートへの記入や話し合いから学んだ研修生でした。また、自身の組織運営への貢献度を振り返る協議や、所属校の学区を構成する町会や伝統的な地域の祭り等について改めて理解を深め、貢献意識を高める機会となりました。

3年間の年次研修のまとめとなる今年度に今一度、地域や関係諸機関等と時機を逃さずに適切に連絡を取り合い、誠意をもって対応することができているのか振り返ることを忘れずにいてほしいと思います。そして、校務分掌など自分の役割を理解して、求められている内容を決められた期限までに責任をもって遂行し続けていってほしいと強く願っています。

3年次研修の開始に
あたって



【2・3年次研修担当】 <教育研究専門員> 額賀 聡・本橋 智博 <指導主事> 山本 孝之

「中堅教諭等資質向上研修」 <指導主事> 塚田 恭平

本研修の授業研究に関わる4単位の研修を、指導課と協働して実施しています。今年度の研修対象者は中学校の主任教諭2名です。1学期には、区内小学校指導教諭による模範授業の参観をした上で授業力の向上等に関して協議し、自身の課題を明らかにするとともに明日の授業づくりに生かす視点を整理しました。2学期には、マイキャリアノートにて公開されている東京教師道場の公開授業、指導教諭による示範授業を参観し、授業者としての視点に留まらず、協議会の在り方についても学びを深めました。

本研修での学びを生かし、若手教員等に対して自らの知識・経験に基づいて日常的な助言・支援を行うことを通じて、学校運営の一翼を担うミドルリーダーとして益々活躍していきしてほしいと期待しています。

3 いじめ・不登校等

(1) 誰一人取り残されない学びの保障に向けて

「2割増」「4割」これは何を表すものだと思いますか？

これは文部科学省が実施した「児童生徒の問題行動・不登校調査（2022年度）」での数値です。

「2割増」・・・不登校児童生徒が、前年度より2割増の過去最多の約29万9千人。
(5年間の不登校児童生徒の割合は、小学校は0.7から1.7%へ、
中学校は3.7から6.0%へ増加している)
「4割」・・・学校内外の専門機関（養護教諭や学校支援センターなど）に相談していない
児童生徒が不登校児童生徒の4割の約11万4千人と過去最多。

これらのことを踏まえ、千代田区教育委員会は【不登校対策】を最重要課題とし、校内外のセーフティネットの場所を確保することに取り組んでいます。教育課程編成資料「つなぐ・つなげる千代田の教育」内の「②多様性を理解・尊重し、心をつなげる」にある【いじめ・不登校対策】の概要には「不登校は特定の子ども特有の問題があることによって起こるのでなく、どの子にも起こりうることとして捉え、関係諸機関や様々な専門スタッフと連携し、組織的な支援体制を整える必要がある」とあります。

《ポイント》

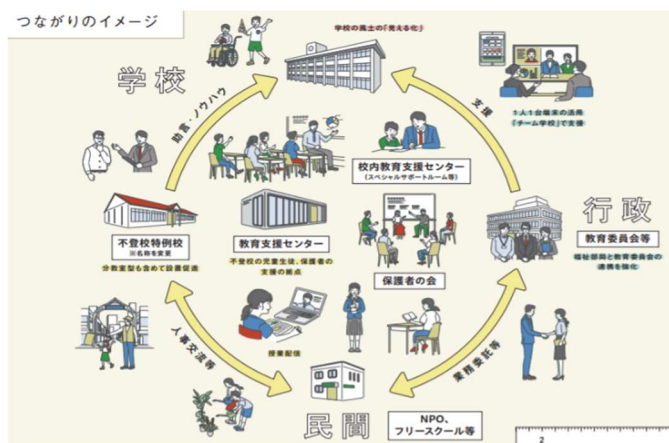
- いじめ・不登校の対応は未然防止、早期発見、早期対応することで効果を上げていく。
- 学校組織と関係機関全体で一丸となって、組織的な対応で取り組む。
- いじめ・不登校対策に向けて、以下の関係機関や外部人材との連携強化に取り組む。
 - ・児童家庭支援センターや白鳥教室等、関係機関との情報共有
 - ・健全育成サポートチーム、スクールカウンセラー(SC)、スクールソーシャルワーカー(SSW)、スクールライフサポーター(SLS)等の外部人材や専門家の活用 ※千代田区の SLS は、いじめの未然防止と早期発見と対応、不登校児童の支援のために、小学校に配置されている。

文部科学省は3月末に不登校対策として、「COCOLOプラン～誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策～」を発表しました。

- ・Comfortable（快適で）・Customized（ニーズに応じて）・Optimized（最適化された）
- ・Locations of learning（学ぶ場所）の頭文字を合わせたプランです。【下記の図を参照】

「校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム）」

- ・自分の学級に入りづらい児童生徒が落ち着いて学べる場所を各校に設置していく。
- 「バーチャル・ラーニング・プラットホーム」 ～ふれあい・学ぶ・仮想空間～
- ・新たな居場所として、タブレット等の端末を使って交流し、学習する。



教育研究所には白鳥教室の適応指導員、スクールソーシャルワーカー（SSW）、学校問題対策専門員がいます。これらの専門家も活用しながら、千代田区教育委員会の最重要課題である不登校対策に学校及び指導課と連携し、「COCOLOプラン」を実現させていきます。また、教育研究所は指導課と共に実施する、スクールライフサポーター（SLS）の研修や学校訪問を通して各校と連携し、いじめの未然防止、早期発見・早期対応に努めています。

【担当】 <学校問題対策専門員> 霜田 浩明 <SSW> 則岡 陽香 <指導主事> 齋藤 秀章

(2) スクールソーシャルワーカー (SSW) について

① 「スクールソーシャルワーカー活用ガイドライン」

全国的に不登校数が増加傾向にあることを踏まえて、千代田区のSSWとして「誰一人として取り残されない」ようにするために、SSWの活用を広めていきたいと考えています。そこで「スクールソーシャルワーカー活用ガイドライン」を作成し、ホームページにも掲載することで、千代田区内の相談機関の一つとしてSSWを活用していただけるよう努めていきます。

SSWの役割は、問題を個人と環境の折り合いが良くない状態として捉え、その状態の解消のため、個人の環境への適応力を高める支援と、環境に働き掛けて問題を解決できるように調整する援助をしていき、児童生徒等の一人一人のQOL（生活の質）の向上とそれを支える学校・地域を作ることである。（「スクールソーシャルワーカー活用ガイドライン」より一部抜粋）

SSWは今年度より「スクールソーシャルワーカー活用マニュアル」をもとに活動をしています。これは、千代田区のSSWの具体的な活用についてまとめた内容となっていますが、大きく変わったところは、学校が「派遣依頼書」を作成し、提出するということです。正式に派遣依頼をすることによって、子どもや家庭が困っていることを整理し、アセスメントをもとに各関係機関の役割を明らかにすることができます。

② 各学校との関わり

今年度より、SSWは2名体制となり麹町地区・神田地区と分けて担当しています。それにより各学校を巡回し、学校で行われる会議等にも参加することにより、児童生徒や家庭の困っていることをいち早くキャッチし、SSWと各家庭を繋ぐ機会としています。また、学期ごとにも各学校の状況を指導課とともに確認し、長期休暇等でも途切れないよう支援を行っています。

③ 外部機関との関わり

千代田区内や区外の様々な分野の外部機関と情報交換を行い、地域で子どもの育ちを見守るために様々な分野の課題について共有をしています。また、児童生徒や保護者の方の了承が得られた場合には、繋がっている機関と連携をして、一人一人のQOL（生活の質）の向上に向けて一緒に支援を行っています。子どもたちの育ちを地域・ネットワークで支えていくことが必要です。

【担当】＜学校問題対策専門員＞霜田 浩明 ＜SSW＞則岡 陽香 ＜指導主事＞齋藤 秀章

「個別最適な学びの実現に向けて」 ＜指導主事＞ 齋藤 秀章

「個別最適な学び」、最近よく耳にする言葉です。これは、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年1月26日中央教育審議会）にて提言されました。私は、個別最適な学びの実現のために、教師の役割として「指導と支援」「環境構成」の2つが鍵を握ると考えています。

小・中学校において、最初は教師主導で授業を展開していくことは必要だと思います。しかし、いつの日か子どもたち自身に学びの内容を委ねていくことを見据え、学習課題や学習問題、学習計画の設定の仕方、それらを解決するために「環境」（学習資料・教材教具・ICT・場所など）を有効活用する術を意図的・計画的に「指導」することが大切だと思います。

そして、教科や単元に応じて部分的・全体的に子どもに学習を委ねていきます。この過程で特に大切なことが「支援」です。指導したからといって支援を怠ってしまったら「放任」になるからです。適切な形成的評価を実施しながら、子どもに学習を委ねることで「個別最適な学び」は実現されるのではないのでしょうか。

今、求められている授業について今後も追究していきたいと思います。

4 白鳥教室

白鳥教室は、様々な理由で登校できないでいる子どもたちが、安心して過ごせるための教室です。白鳥教室に通室することで生活リズムを整え、学習や栽培・軽スポーツ・レクリエーションなどの体験活動を通して、社会的自立に向けた力を養っています。



5月 調理実習の様子

年齢差や互いに多様な状況を抱えながら白鳥教室で過ごすことへの不安を軽減できるよう、適応指導員が子どもと相談し、安心して過ごせる方法を一緒に考えていきます。また、今年度より夏季休業中の始めと終わりの週の開室を実施しました。午前中のみの開室でしたが、予想よりも多くの児童生徒が出席しました。

新型コロナウイルスの影響で制限されていた体験活動については、社会の状況を踏まえつつ昨年度よりも回数を増やし、様々な活動を計画しました。6月には、上野公園への校外学習を行いました。午前中は上野動物園・国立科学博物館の選択制、午後は国際こども図書館見学を行いました。それぞれの興味・関心に合わせた見学をするとともに、グループ行動を通して互いの親睦を深めることができました。

7月には、白鳥教室に昨年度通室していた高校1年生6名を招いて、「卒業生の話を聴く会」を開催しました。志望校決定までの流れや受験準備の仕方、高校生活の様子など、実体験に基づく貴重な生の声を聴くことができました。9月には彫刻家の先生をお招きし美術教室を開催しました。ウッディねんどという木の粉が入った粘土を使い、思い思いの作品を創りました。

他にも、たこ焼き、栽培活動で実ったズッキーニや枝豆を使った調理実習などを実施しました。

今後も、子どもたちの社会的自立に向けて、知識や考える力、豊かな心を養う一助となるような体験活動を工夫して行いたいと考えています。



6月 校外学習（国立科学博物館）

【担当】 <適応指導員>新井 聡美・松山 美紀子 <教育研究専門員>宮森 巖・宇田川 嘉一
<学校問題対策専門員>霜田 浩明 <指導主事>齋藤 秀章

5 教育情報

(1) 教育情報資料

情報資料室では、文部科学省が発行している「初等教育資料」「中等教育資料」の他、「総合教育技術」「指導と評価」「幼児教育じほう」「発達」、月刊・季刊の教育雑誌バックナンバーなど、毎月の園・学校だよりや研究発表資料をはじめ、他地区から寄せられた資料も整理して保管・常設しています。これまでの千代田区の学校教育情報が閲覧でき、最新の教育事情を収集したり、教材や教育資料を探索したりするなど、教材研究の一環としても活用していただけます。

(2) 教科書採択・教科書展示会

現在使用している千代田区立小・中学校・中等教育学校、特別支援学級の教科書の他に、各課程の高等学校、弱視者のための拡大教科書等も展示しています。また、過去に使用された教科書も年度ごとに保管していますので、現行の教科書の他に閲覧していただくことも可能です。

なお、6/8～7/2の期間、令和6年度使用千代田区立小・中・中等教育学校（前・後期課程）、特別支援学級の教科用図書の採択に向けて、千代田図書館において教科書展示会を実施しました。

【担当】 <教育研究専門員>長田 眞理子・本橋 智博・宮森 巖
<指導主事>齋藤 秀章 ※所報は教育研究所のホームページでも見られます→

